



安永九

初懷中



花はもろむしあんなさる
 める垣根うかわるゆゑにさしあせ
 柳は三つをさしあせ柳は八つ人
 ももたふれりなむ
 美柳をさしあせりみよ外
 とりせしう又あせりもあせり不
 とり持ちあせりあひて三伏乃夜ハ



天地を覆ひ布くる窓もくらく
おとろけをわさく芥子枝をち
たをさすうしんたあはは地の
めくみはふやうし

伐るま枝をさるる柳のち

いふそわしう又すまふらふら二丈
まも海のてふあをさうくにみとあはく
かの五柳先生の門前の柳よハれ

あはれといはくう柳のちの心をあはし
に足れやうれを

先んぞんしとにめいふま柳のち

これおけあうおみりもたうて例は
初懐のちのこを催すことあり
あや傳りぬ

庚子年

春夜樓晋明述

安永九庚子春正月十日於春夜樓與記

俳諧之連歌

老をめでとにめでと手柳の乳 几筆

人も目さすせまき乃あきふの御嵩

駒 ひを雀さへけり雉啼て万容

よき酒ぬる旅のうねり趙水

百姓の抱いろくは存の秋霞吹

種わきのほろをあそえ燕史

やめおろし南風のを 嘆の土梨魚赤

手澤乃計の影りとはし都風

娘乃ほろを成ひとも憐みえ 淋少

小菫の神乃ちもひし路成

たふさげし宇治の巻を小高ひ 雨亭

いろさすあかぬましきり士光

めはほしい木咲の梅り二日月 九湖

君志ろしめす俳諧乃發句 掃仙

土器よりこぼるる水あり 破れを佳章
くち化粧ひるるすすい~~の~~の白松亭
眩ましくもあまの山 湖柳
かすみそくつおる 洛陽の城 雷夫
かともちの啼 屋を習く 沙生 春吟
蒼麦 嘘をこて 主客 眠水り 凱田
かこくもろおの 袴 舞 こと 進 竹裏
只ひとくろく かみ 八 あり やこ 看山

葉合のありとすむる ぬ石 舟 笛 来
米乃 お庭 ちこ 又 竹ノ ちやり 遊市
何りしめ 鞆乃 料理をいひ 付て 本 明
夜し 三線をくらる かくれ 家 鉤 使
月更え 妹り 小 燈を かくらん 雷 牙
あねと 越路乃 雅わらる 芭 車 葉

右一ツの畧

各詠

鷺も花うゆゝゝゝゝ音りぬ 九湖
町は居て山も暮れぬすゝゝ 魚赤
や婦入やとゝも同じ家毎丁万容
耕や幸剛おつゝも迷ひ及路曳
古市乃抱女もとめん春乃雨浪花竹裏
都もも田少し賣老也やんぬり 津少
小生ふか後やる時や春の水 越風
障子明し一碗の茶や春の梅 越水

鰻はくゝ人や柳の木のたれり 橋仙
魚と我錦くゝもひん 鮎ひとら 燕史
堀あし乃池やゆくよ市草り 湖柳
菜の花や前も昔も名物なく 霞吹
日ハ落し春のゆるみや啼 蛙 湖高
雪の積ふひるも 梅の門 土老
隣家より 醜くも 酔家かか 雨亭
あ乃之やあしあもも花のさう 釣使
やゝあももあももや雁の色 李門

くをばすまゆり髪をねて空白し看山
夕ひをりかきする解乃ちしゆ外篇来
梅咲く股曳のけの禮者おれ瓢子
春菊の鼓の音もきこゆへりり不酔
室川やうはくまきに網のあとえ女
雪のまほしくさふをうきあ遊市
室引く繪双舟ゆきし川の市九洲
下才乃笑ふ花又おきし種車^草紫
梅深の暖笑白あや春の風雷夫

其引

いぢゝきの朝氣うるまき春の豹佳章
くくひまのあはらとたりの雀外松亭
春菊やたのこやうりまきうのまこら
春あけりよふのまきうらひ外アは
春の月をうく雪のおゆゑる^キ董
えくくしよまきの集や梅の影

三三

伏水

市野織窓へもく然のみるひより梅山
うは葉のせしむとへや庭の梅梅洞
梅咲や元へそるよや窓の文字樂笑

類波女

東都

うはひよの女又あふりもれりう然
いと和ぬりひよもゝ孫や和瀬詣 夏尼

芭蕉庵下

後のおやかすもて帰一層の巻 松宗

正月七日檀林會一順

蕪村

宇冬ひすや茨くわしきく飛

山田り鋤を八く陽冬 几董

西國の大岩通る 老々れて 道立

香具屋店の普請出まきり 百池

あふゆり誰も雨待夕月夜 田福

くさくさ乃花のむす女をく候 維狗

石垣に水ひつくと秋の風 正白

こやひあさる園ちり白 月屋

同席上探題

妹々垣根三味線草の花咲如	船造るみねめの浦の春日多	水仙の圃花水多	五ら弓向あゝかすむ柳か風	陽空和木挽の汁乃煮る音	芥肥てきいぢま水のゆるみ
燕村	百池	維駒	月居	田福	道立

琴心挑美人

春興

蔓やあめ故を梅雪如く 真平

酒園雪解の窓を突上む花打
雪とけの音やひく居る影移し 几董

其引

春かすもくや舎那の鼻の下雷牙
砾する人を尻目や猫の恋 几董

老魚

壬生念御舞子り母乃日傘一月溪
 枯枝より老の姿ありるの啼 自笑
 畑の梅日あけはくくむすりる馬 集馬
 梅と書文字も白あや古梅園士象
 うきいすの啼や二日の木居る 紫洞
 菜のちややむるの穢うつくし如 来雨
 穢多村もともくうつむや老を如 二頁

月勝老魚や河水の雪 徳地
 月くさし心のろくや老の面 舞園
 堀あゝ枯く水立ふ柳一丸 文皮
 臆をこえり志のふく鳴く雀 斜燕
 長閑さうり出して水宿を夕 才馬
 乳く田のり眠ある 蛙 一七中 管鳥
 うらみや青や房の抱りあえ 銀獅
 雪とげや思ふげひの水の音 心頭

書信

浪連

山灰燼のりやりのすまや小姓く梅 志慶
竹のこもむくし那のや維の志う、亀友
梅白し月おほうね神一詣、九序
水風露の竹簾かゝるも 老ゆわを 白堂

但馬の湯あまありし

鼻の先の山も更くもはるあ 正名

人日

重きうにまきしづのきの市付のれ 旧國

梅

敏馬浦

みくら花や梅おくの歌法師 士川
折とみやかあま梅乃蒼あり、士喬
いっしうの月のおめくく人のを、士巧
や、くの千両道具梅乃月、佳則

岳庫

草のそや鏡まきさくしう宛のむ 来也
軋山の陶ありぬ梅の下、里由
梅のうら一文几中のそよき外、清夫

春興

春風やいらすを比良り並院中是 仰宇

梅の香のけさるや梅大津 芒原 琪道

山吹や机の上の 無言抄伏水 鷺喬

かげらやや梅並く鮎の光より来之
柳より落てハ白き一つく外 丑雲

鶯の古き声も志さふ 初立りの家 標良

おもひの夏のうきさや梅咲 江涯

初音こゑは心よ 對か 是春加賀の麦水

溪のおろ水よりぬき 白梅浪華 二柳

うねむすやおのよきれつ夕啼寸 曉臺尾陽

春の月あもも酔し 白梅子 蝶々

梅や心つよくも厚子江戸 暮太

冬夜奥

少くも序程いそぎしうね種分

此非

箕よりしおれを何れなく晋明
流火の答は魚のとほりて維駒
建ぬ志げき戸のきくると柴庵
めはしき心は守月の子は
雁の何れぬり智めく行 此

衣掛そのまをしおれをきかき
よきまのしひはゆりよきま
水前を流しき志守は茄子
読るるんききそりあはとれ
おのくは年ハ九十は是るすや
一夜より満る暇旬百韻
花よはふ奈良の古き閑りれる
鳥の跡より砂よ陽光 此

此の水大^ふき舟を漕よせし夜半
重き鎧の上帯をとりく
修城より砂をせり舟の前
いせの立見路をとりおろし
石の字の糸を繞り舟のすまひ
おさあきし人へ各治を飾る
むく犬のいせを記すし先くれ
風もさようぬ北戸のやれ垣
弱 庵 非 弱 半 非 弱

旗下仰々鼓とくらく雲の岸
ありや羽織の袖を引裂衣
まゆりのかみはちき世葉州破
西敷きほしるあとの月しり
芭蕉の水田の鳥より矢を放ち
舌番といはる山々の聲
世成とらむくをんせり小肩衝
まのめい御事げめい追了
半 庵 非 弱 半 明 半

明やせきおを寐さうらう芳れ白
残れた馬士のあゝ熱くそ
懐お落すいやよ又錢の音
松の尾りけし凍とけの尾
初れう彼者さくは杜乃中
うらかほほほ鐘や也 春 執筆 庵

冬

白妙やはほくさう雪の雪くりり 東武 春里
雪の日や出桶り硯打けし 旧国
志くく水の上れる雲あかれ 久光
梅さくや脚走の東風のちよ觸 東助
雨り踏ふち紅梅の光るれ 子夷
旅人よ我糧ここのつ雪か 几董

春五句

几董

うまひすやしせ踏をゆる曆臥
地わしやむこく銭とる春の水
雪踏ふそたる山海の流くし外
畑う寸翁の既中ゆみなり
飜乃そある長閑しいうのほり

梅

夜半亭

原山をわさうそ梅の所々か

平安書肆橋仙堂梓



